矢作川研究　No.11：1～3，2007

新々々々々・良く利用され　なお美しい矢作川の創造をめざして

―― 矢作川への「情緒」を考えて ――

Towards the creation of beautiful Yahagi River even hardly utilized Ⅸ

新見　幾男

Ikuo NIIMI

矢作川の「川の風景」という点で最もきびしかったのは，昭和30年代半ばから昭和40年代半ばにかけてのおよそ10年間だったと思う．中流域からは鉱山系の白・黄・茶色の泥水が流入し，下流域の工業地帯からは黒色の工場排入が流れ込んできた．正月とお盆で流域のすべての企業が休業している時のほかは，矢作川はまるで企業の排水路の観を呈していた．

矢作川流域は他の地域より一足早く高度経済成長期に入っていた．山砂からコンクリート骨材の「山砂利」を精製する過程で大量のヘドロ（粘土・シルト）が出た．各企業ともヘドロの沈殿・回収装置を備えていたが，回収技術が未熟だった．完全回収には経費もかかった．昼間は沈殿槽にヘドロを貯留し，夜間にそれを放出することが常態化していた．黄・茶色の泥水で支流がほぼ壊滅し，矢作川本流も大きな被害を受けた．窯業原精の精製過程からは白泥水が出ていた．

ほぼ同じ時期に，自動車産業のメッキ工程等からは黒色の工場排水が出た．やはり支流や溜池を壊滅させ，本流にも多大な被害を及ぼした．矢作川本流は中流から来る茶・黄・白泥水に下流で黒色の工場排水がまじり，手の付けられない状態の時期があった．

昭和47年（1972）６月26日，矢作川沿岸水質保全対策協議会（略称・矢水協）が事態を打開した．山砂利採取の悪徳３業者を矢水協が告発し，愛知県警が３社を強制捜査した．水質汚濁防止法全国第１号の摘発だった．翌27日から矢作川はきれいになった．零細な山砂利業のほとんどが廃業した．中・大型山砂利業からも廃業が出た．経営を一時ストップし，ヘドロ回収を改善した工場もあった．自動車産業も汚水浄化施設の本格改良を始めた．

矢作川に昔の清流が戻ったわけではないが，明らかに最悪の事態は脱した．３社逮捕の翌日から茶・黄・白色の泥流は消え，流れに青さが戻ってきた．鮮明な記憶である．矢作川に「川の風景」が戻ってきたと思われた．あの泥流が続く中では，今の矢作川の天然アユ保護活動も，川の風景づくり運動も，発想し得なかったと思う．

矢水協は農業・漁業・都市用水団体を中心に昭和44年（1969）９月に発足した，オール矢作川の民間団体である．当時から事務局は安城市の明治用水土地改良区内にあり，事務局に同土地改良区職員兼任で内藤連三氏という精悍な男子がいた．彼は警察官や報道記者をともない，日夜汚濁発生源の探索を続けていた．当時，矢水協と豊田水質調査会のパトロール隊が山中で遭遇し，若き日の内藤氏と対面した．人を怖れぬ直線的な性格の人だった．彼の存在なしには3社告発・逮捕はなかっただろうと思っている．

矢作川に青い流れの「川の風景」が戻ってから，人々が徐々に川へ帰ってきた．豊田市扶桑町の矢作川に近自然型の古(ふっそ)甫水辺公園が完成し，

同公園愛護会＝写真前頁＝が誕生して竹林整備などの「川の風景」づくりを始めたのは，平成４年（1992）５月のことである．矢水協の活躍で矢作川に青い流れが復活したのは昭和47年（1972）のことであるから，すでに20年の歳月が流れていた．

矢作川の古甁水辺公園というのは，当時の愛知県豊田土木事務所がスイス式の近自然河川工法で延長約800ｍの護岸工事を行い，その副産物として産まれた水辺空間のことである．近自然の思想で誕生した水辺空間は近自然の思想で地元で管理しようということで発足したのが，地元住民のボランティア団体「古甁水辺公園愛護会」である．会員は約30人で，市河川課が支援している．前ページの写真は，発足まもない頃の会の役員の皆さんが，竹林管理作業のあいまに休憩している風景．左端は初代会長の村山秀夫さん，右端は近自然河川工事を現場で指揮した外狩久男さん（当時矢作川漁協地元支部長）である．

古甁水辺公園愛護会の主たる仕事は，密生状態の竹林を伐採したり間引きしたりして，竹林を徐々に樹林へ更新し美しい河畔林を育てることだろう．公園内の清掃，草刈り，水洗トイレの管理，県市との連絡調整なども日常的な仕事である．また公園利用者が非常に増えたため，最近では利用者のマナー向上も大きな仕事になってきた．

この水辺公園の開設当初には思ってもみなかったことが，その後に起きた．美しい木かげのある水辺ができると，利用者がどっと増え，ゴミを捨てていく人が目立つようになった．若者や外国系の人々がひどかった．愛護会の人たちが気長に，時には強権的に公園利用のマナーを指導してきた結果，ゴミ散乱の最悪の時期は過去のものとなった．

古甁水辺公園愛護会に続いて，波岩水辺公園愛護会，アド清流愛護会，石倉水辺公園愛護会，梅坪水辺愛護会，西広瀬町矢作川水辺愛護会，百々水辺愛護会，御船せせらぎ広場愛護会（支川）が誕生し，古甁地区と同様の水辺管理のボランティア活動を続けている．

これらの水辺愛護会に，愛知県豊田加茂建設事務所，豊田市河川課，豊田市矢作川研究所，矢作川漁協，矢作川天然アユ調査会，矢作川を筏で下る会，児ノ口公園（都心の近自然公園）愛護会が加わり，合計15団体で矢作川「川会議」実行委員会を作っていて，毎春古甁水辺公園にて，「美しい川とは何か」等々をテーマにシンポジウムを開いたり，15団体会員の大交流会を開いたりしている．

矢作川漁協は上記の「川会議」の共同事業のほかに，各水辺愛護会などと同様に，古くから独自の河川愛護活動を続けてきた．春夏秋の年３回，組合員総出で全川において，水辺の草刈り，ゴミ拾いなどの清掃活動をする．河川来訪者にゴミの持ち帰りを呼びかけたりもしてきた．あとで述べるが「美しい河畔林」づくりの運動も昨年からはじめた．

さて，前述の古川水辺公園愛護会などのボランティア活動が行われているのは，豊田市の中心市街地（都心）から少し上流の地域である．冒頭で述べたように，矢作川の水質は最悪の時期を30年前に脱し，その後も下水道の普及などで年々向上している．その上に，水辺公園愛護会の存在する市街地上流地域では，ゴミの散乱問題はまあまあ解決したといえるのではないか．

水質・ゴミ問題に続く「川の風景」づくりの課題は，昭和30～40年代以降放置されたままの河畔林（特に竹林）の整備だろう．竹林は過度に密生し，枯竹が内部で無秩序に倒伏したりしていて，人が川に近づけない．川面を見通すことさえ困難な状態だ．内部を野鳥や蝶類さえ飛べない．木々の芽生えも極端に少ない．

しかし，古川水辺公園愛護会などの様々な水辺愛護会が活躍しているエリアでは，竹林の過密状態が解消されつつある．長い水辺の中に点々と美しい河畔林がスポット的に甦ってきた．

私はそういうスポット的な河畔林整備でいいと思う．何年か前，市が長い水辺の竹の密林を連続的に伐採し，内部に散策路を設置したが，それは数年で竹の密林の中に消えてしまった．街づくりでいうところの「コンパクトタウン」づくりの理論を援用して，人々が常に使いたい水辺，つまり水辺愛護会が存在する水辺の河畔林整備だけは「継続管理区域」とし，そのほかの水辺は「放置管理区域」として自然の遷移にまかせ，研究者たちに観察を依頼したらどうだろうか．

矢作川の長い延長の水辺の中に「継続管理区域」と「放置管理区域」の両方ができた場合，その２区域の存在は面白い「川の風景」の対比になると思う．現在の河川ボランティアの陣容では「放置管理区域」を残さざるを得ないし，そこは野生のサンクチュアリでいいのではないか．人と野生の共生・棲み分けが実現できるかも知れない．将来の可能性として残す区域であるが，問題はそれらのことが河畔林整備の「理論」（コンパクト整備の理論）としてオーソライズされるかどうかであろう．

さて，以上の水辺公園愛護会群が存在する豊田市中心市街地北部の矢作川では，河畔林の「コンパクト整備」の理論さえ確立されれば，長期的視野で，水質・ゴミ・河畔林の３点の課題が解決され，美しい「川の風景」が次第に創られていくと思われる．川の中に天然アユや各種魚類が豊かに棲み，岸辺には野鳥や蝶がとびかい，女性や子供たちも川に集まって来る．そういう理想・夢をここでは追うことができるのではないか．

問題は水辺愛護会が存在しない豊田市街地（都心地区）の矢作川である．久澄橋～豊田大橋～高橋の1000ｍ余の区間である．公園管理者（市）が清掃をしない時にはゴミが散乱する．市民利用の多い地域だが，河畔林はまったく管理されていなかったのが現状である．

この地域のうち豊田大橋～高橋の約600ｍの左岸（豊田スタジアム側）で，矢作川漁協の「森林塾」の皆さんが３年計画で模範的な河畔林づくりを行っている．昨年（平成18年）度着手し，今年が２年目である．最終年の来年を待たずして，今年のうちに「美しい河畔林」の形が見えて来るかも知れない．今は漁協豊田支部（都心地区の支部）中心の組合員と一部一般の人々も参加するボランティア活動であるが，ここから将来は都心地区の水辺愛護会が誕生していくのかも知れない．

この河畔林整備は，国交省豊橋河川事務所，豊田市河川課・森林課，豊田市矢作川研究所の指導のもとに行われている．12月～５月の冬春には毎週土曜日朝８時半から午前中，竹林の伐採，間引きなどの作業を行う．夏には毎週土曜日早朝の５時～７時に，竹林伐採跡に生えて来る竹の子や雑草を刈り取る．森林塾長の硲（はざま）伸夫さんが森林ボランティアの経験を生かして，仕事の段取りと指揮をしてくれる．２年目の今年，間引きした竹林のすき間から水辺の柳の大木や矢作川の流れが見えてきて，参加者たちは川の美しい風景に感動した．前ページ写真は，その林で休憩時間に記念撮影したものだ．

ボランティア作業の基本は，過密の竹林の皆伐と間引きである．竹林の中の柳やエノキを甦らせ，伐採跡の木々の芽生えを大切に育てていくことだ．竹林も管理しやすいような形で一部残す考えだ．参加者の多くはこの地区の矢作川の天然アユの釣人である．美しい「川の風景」の中で，矢作川と自然と人間を愛する情緒が育ち，それが「永遠の矢作川」につながっていくことを信じている人々である．

豊田市矢作川研究所運営協議会幹事，矢作川漁業協同組合第９代組合長：〒471-0025　愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館 １F